

2006年度
Block 6後期 テュートリアル課題

課題番号 7

働きたい



※断で複写・複製・転載すると著作権侵害となることがありますのでご注意ください。

麻醉科学 加藤 隆文

シート1

東民夫さんは59歳。生来健康で人間ドックで異常を指摘されたことはなかった。シンガポールに出張し、帰国後、咳と痰が出現。1ヶ月しても改善がみられず、外来を受診しました。

アサ科

アサ科

シート2

肺に影が見つかった東さんは、外来でたくさんの検査を受け、入院治療をすすめられました。

シート 3

肺がんの診断で入院し、精密検査の結果、転移がみつかりました。主治医からの説明を聞き、“手術できないなんて、、、自分はこれからどうなるんだろう、、、”と、一時は絶望的になっていた矢部さんですが、仕事が山積しており、何としてもやり遂げたいプロジェクトがあったのでこれを目標に治療を頑張るようになりました。

シート4

化学療法と放射線治療を終え退院し、仕事と通院の日々が続いていました。半年くらい過ぎた頃、足の痛みと痺れを自覚するようになってきました。日に日に力も入りにくくなるようで、歩けなくなってしまうのではないかと不安で夜も良く眠れなくなってきました。

シート5

検査で多発転移が見つかり再入院の上、治療が追加されることになりました。治療や痛み止めの薬も追加され、徐々に痛みは軽くなっていきましたが足の痺れはひどくなりついに力が入らなくなってしまいました。どうしても、家に帰りたい東さんのために在宅治療に向けての手続きが始まりました。海外では進行性の肺がんで延命効果のある薬があるのに日本にはどうしてないのだろうと悔しい気持ちです。